

市の教育要領等イメージ図

留意事項:

- ①生き抜く力を持つために、様々に必要な能力の中で、特に**自己肯定感(自尊心)・コミュニケーション能力・考え抜く力**の3点を焦点にして、就学前～小～中学校までの一貫した取組みを重視する。
- ②非認知能力の向上を重視
- ③テスト成績至上主義では逆境に弱い人が多い。(経験則)
- ④成績は非認知能力がつけば、結果としてついてくる。
- ⑤成績は自己肯定感とも連動する。

中学校教育

社会に出る為の準備期

社会の理解と行動の実践、疑問を持つこととその解決策等の思考の習得。

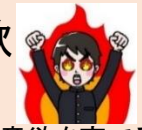
2. 魅力的な教育環境



生徒が学びたいと思う環境構築。

- ①自身が認められる環境
- ②良好な人間関係の構築
- ③中学校給食の向上
- ④成績が振るわなくてもドロップアウトしない居場所の構築

1. 学習意欲向上



主体的に学ぶ意欲を育てる。(やる気スイッチ施策)

- ①キャリア教育(職種体験・社会人トーク等)
- ②キャリアパスポート
- ③学業とのリンク

3. 様々な体験活動

様々なコト・モノの直接体験と成功・失敗の体験は、感性を豊かにし、思考の幅を広げる。(考え抜く力を意識すればなお良し。)

4. 読書活動



読書活動の継続

- ①情報リテラシーの向上
- ②目安1日1時間未満※2

5. 家庭学習



家庭学習は成績に直結。

- ①目安1日2時間以上※2
- ②自習できる環境の構築
- ③スマホ使用時間の制限

中1ギャップの解消

不登校対策等は小学校から必要

生き抜く力を持つ人へ

社会人、大学、高校等で培われた能力を活用。
上記を目指して就学前教育施設・小学校・中学校が一貫して取り組むことが求められる。

小学校教育

素直に物事を吸収力できる時期

社会の学びと学びの習慣づけ。
自発的な学びのサイクルの習得。

2. 魅力的な教育環境



児童が学びたいと思う環境構築。

- ①自身が認められる環境(自己有用感の向上)
- ②良好な人間関係の構築(いじめ対策)
- ③保護者や地域との連携

1. 学習意欲向上



主体的に学ぶ意欲を育てる。(やる気スイッチ施策)

- ①キャリア教育
- ②キャリアパスポート
- ③学業とのリンク

3. 様々な体験活動



体験格差の是正。様々なコト・モノの直接体験は、感性を豊かにし、思考の幅を広げる。

- ①様々な団体等との交流(特別授業)
- ②社会見学等の充実

4. 読書活動



読書活動は想像力・論理的思考力を養う。

- ①目安1日1時間※2
- ②学校での朝読書の習慣づけ等
- ③学校・家庭の蔵書を増やす。

5. 家庭学習



家庭学習は成績に直結する。

- ①目安1日1時間※2
- ②自習できる環境の構築(SUNSUN塾、放課後しゅくだい広場等)
- ③スマホ・ゲームの使用時間の制限(脳と目に悪影響)

就学前教育

学びの基礎力を養う極めて重要な時期

地頭を良くする。公立・私立就学前教育施設の底上げで、小1の格差を解消する。

1. 就学前教育施設の取組み向上

- ①就学前教育・保育実践の手引きの改訂
- ②教育委員会と就学前施設との連携
- ③教員等の情報共有

2. 自己肯定感の向上

- ①親子のふれあい
- ②「共有型」しつけの実践※1

3. 運動能力向上

市の課題である運動能力向上の取組み

4. 語彙力の向上



幼児の語彙の豊かさが、将来の学力や成功能力に影響する。コミュニケーション能力にも影響。

- ①漢字遊び・言葉遊び
 - ②読み聞かせ
- (将来的な読書活動に影響)

5. 親学習



学びの基礎力を養う貴重な時期を効果的にするには家庭での取組みが必要不可欠。

- ①参観時の啓発
- ②プリント配布等

非認知能力の向上が特に重要。

小1プロブレムへの対応

環境の変化への対応

- ①施設と小学校の直接的な交流
- ②接続期の事前準備等
- ③小1スタートカリキュラム作成

1. 2. 3で自己肯定感を高める。

2021年、教育委員会は各学校に「キャリア教育」と「魅力ある学校づくり」を方向付ける。

2019年頃から掲げている教育の取組みイメージ図



イメージ図作成にあたっての背景等

大項目	小項目	内容
全 般	留意事項	<p>コロナ禍において、日本の教育の弊害がより一層表面化した。権威的なものに対する盲目的な姿勢や他者の異なる行動を認めない同調圧力、表面的なものだけで判断し行動してしまうことは、これまでの与えられた答えが正解とされる教育システムの中で、深く考える力が全体として不足していることを明らかにしたと考える。横並びかつテスト成績至上主義では、生き抜く力は適切に育むことはできない。今、その対応が求められる。 (生き抜く力は、文科省が進める「生きる力」をさらに強化したものである。)</p>
	幼保こ小中の連携	<p>望ましい大人像があり、逆算して各発達時期に応じたあるべき姿・望ましい方向性を示し、その方向性に沿って各時期の具体的施策が求められる。</p>
	自己肯定感	<p>自己肯定感は、恐れや不安といったネガティブなモチベーションではなく、信頼や安心感をベースに前進する力をもたらすものである。そして自己肯定感は、周りに流されることなく自身で考えて行動する気持ちである主体性と繋がっている。主体性を無くしては生きる力を養えない。しっかりと自己肯定感を高める取り組みが必要である。</p>
	考え抜く力	<p>考え抜く力とは、厚労省のEmployability Check Sheetの社会人基礎力に記載されているもので、「疑問を持ち、考え抜く力」で、課題発見力・計画力・創造力と示される。この能力が自身も含め多くの人が足りていないのではと実感する中で、改めて社会で生き抜くには、この能力の育成が必要不可欠である。</p>
	コミュニケーション能力	<p>コミュニケーション能力は社会を生きるにあたって極めて重要である。職場を辞めるその大半の理由が人間関係※3とされるように、良好な人間関係の構築は社会で生きるに有利に働く。その為、適切なコミュニケーション能力を養うことが必要である。コロナ禍で、挨拶もできないコミュニケーション能力が低い児童・生徒が増加し、その対応が求められる。</p>
	市の課題	<p>本市の児童・生徒の課題として、全国平均と比較して、学習意欲の低さ(TVやゲームをしている時間が長い)・自己肯定感の低さ・家庭学習時間の短さ・読書活動の低調さが挙げられる。それらは家庭環境に起因するものと思料。この課題を家庭だけでなく、公で対応する必要がある。</p>
就学前教育	全 般	<p>小さな時に、地頭を良くする。就学前教育は一般的には5歳向けが主となるが、0～4歳も含めて学ぶための基礎力を適切に培うことが極めて重要である。この段階がその子どもの将来を決める要素が大きい。子どもの学力格差の原因は、経済格差ではなく大人の養育や保育の仕方が媒介要因※1とされる。(「共有型」しつけ(子どもとのふれあいを重視し、子どもと体験を享受・共有する)を行う家庭)</p>
	小1の格差	<p>小学生1年生で既に学力格差が生じている。小1でハンディキャップを背負わせることは適切ではない。学力格差がつく前の取組みが重要である。ただ私立の施設が多く、これらの積極的な協力がなければ施策として成り立たない。</p>
小学校教育	課 題	<p>令和4年摂津市学力定着度調査では、6年生で自己肯定感は全国平均を下回り、学習習慣では全くしない子が全国平均より約10ポイントも多い。GIGAスクール構想はコロナ禍での学びの提供はできたが、自己肯定感等を含む成績には関与できず、ツールでしかないことが明らかとなった。</p>
中学校教育	課 題	<p>令和4年度全国学力・学習状況調査結果概要では、読書を全くしない・家庭学習を全くしない生徒は全国平均よりも多い。また、教科が高等化していく中でついていけない生徒が増加し、それがそのまま学ぶ姿勢に悪影響を及ぼしており、その対策が必要。(小学校からの課題でもある。)</p>

※1「幼児期から学力格差は始まるか - 経済格差を超える要因の検討」内田伸子
 ※2「本の読み方」で学力は決まる 青春出版社2018 川島隆太監修
 ※3 転職理由と退職理由の本音ランキングBest10 リクナビNEXT HP